

## Game Start.

その場に立った時、俺はこれが夢だとはつきりわかった。

でなければ目の前に立つ渋谷系の男は自分のホームに居るだろうし、どちらかといえばスポーツマンタイプの俺に向かって友好的な、でも胡散臭い笑みを浮かべてくることは無いだろう。

「はじめまして、浩也君。君に忠告があつてきました」

彼は俺の名前を正確に呼び、アイドルグループ顔負けのイケメンボイスでこう続けた。

「この度、君は五日以内に死ぬ事が決まりました。この決定は絶対であり覆すことができません」

笑顔を崩さずに随分と物騒な事を言う。

「ですが、ただぼんやりと死ぬのを待つだけなんてつまらないでしょうし、私とゲームをしましょう。君が勝てば、生き続けることができます」

「俺が死ぬって証拠でもあんのか？　そもそもお前は誰なんだよ」

突然夢に現れ「お前死ぬよ」なんて言われて「はい、そうですか」と言えるほど、俺はまだ人生を捨ててない。

しかし、そんな言葉は最初から言われると判っていたのだろう。彼は黒く長いコートみたいな服の内側から一冊の分厚い本を取り出した。

文庫サイズの本の表紙には、彼が腰から下げている逆さ十字と同じものが描かれている。

「渡辺浩也<sup>わたなべひろや</sup>、十六歳、共働き夫婦の一人っ子で、都立高校に通っている高校二年生。部活は剣道部、中学校時の同級生である橋本優奈と付き合っているがまだ童貞」

——余計なお世話だし何故知ってる。

「比較的リア充と称される人生のようですね、成績は良くも悪くもないが政治経済が苦手。数ヶ月前に飼っていた猫のドンが亡くなっている……ああ、この子は無事天国に行きましたのでご安心ください。最近少し痩せましたよ、ネズミを追いかけるようになったので」

「ドンの名前が出て俺は少し驚いた。家猫だったし、遊びに来ている優奈以外には口外してないからだ。死んだことは、彼女にすら言っていない。」

「なんだか気味が悪かった。」

「……なんでドンのことまで知ってるんだ」

「この本は……あー、判りやすく言うなら闇魔帳のようなものです。君が生まれてから今までの、どんな些細な出来事でも記載されています。なんなら、最後に自慰をした日でもお調べします?」

「わかった、信じる」

変態かよ、と声には出さずツツコむ。さっきからどうもセクシャル系ばかりを突っついてくるのは気のせいだろうか。

胡散臭い笑みが少し満足げなものに変わったところで、彼は本を懐にしまう。そして舞台役者みたいな大振りの動作で、改まるようにお辞儀をした。

「そして申し送れましたが、私は君の命を貰い受ける者です。君が死ぬまでの間、しばしご同行させていただきます」

その動作につられるよう視線が男の足元に移る。

ロックミュージシャンのようなゴツくて黒いブーツを履いていた。

「ようするに、死神、ってことか」

随分と現代的な格好をした死神だ。

俺が顔をしかめてそう呟くと、彼——死神は顔を上げた。胡散臭い笑みではなく、少し真面目な顔をする。

「残念ながら名前はありません。『死』に名前なんて必要ないでしょう？ 君たちが自殺、他殺と呼ぶのはあくまで過程。その先はどちらも『死』であることに変わりはないのと同じようなものです。ですが、そうは言っても解りにくいとは思いますが、君たちにはその俗称の方が馴

染みがあるというのも理解してますので、そうお呼び頂いてかまいませんよ」

説明されても意味はよく解らなかつた。

「で、その死神が俺にゲームを持ちかけていると。五日後に死ぬから？　俺すっげえ健康体なんだけど事故にでもあうわけ？」

そう、問題はそこである。

学校の健康診断で異常があつたわけでも、今まさに大きな病気をしているわけでもない。どう考えても、交通事故くらいしか原因は思いつかない。

なら五日間学校を休んで家に居れば問題ないんじゃないのか、そう簡単に考えてしまう。

しかし、彼はあっさりとそれを否定する。

「君が死ぬ事は決まっているので、どこで何をしていようが関係ありません」  
そりゃそうか。僕は納得する。

「それにひとつ間違いがあります。君は『五日後に死ぬ』のではなく『五日以内に死ぬ』んです。いつ死ぬか判らない恐怖を味わっていたくのも、このゲームの醍醐味です」

「悪趣味だな」

「スリルがあつて良いでしょう？」

はつきりと不快を示したが死神は気にする様子もなく、むしろ楽しそうに笑つた。

「待つだけなんてね、つまらないんですよ。獲物は追い詰めなきゃ」

人間にはありえない赤い目が細く、弓なりに反って俺を見る。

まさに悪魔の笑み。

そう思った瞬間に辺りがぱっと明るくなった。

## Last 5days.

習慣づいているためか悪夢を見た事など感じないほど、すっきりとした目覚めだった。

昨夜はちょうどテレビでホラー系特番がやっていたから、影響されてあんな夢を見てしまったんだ。そんなことを頭の片隅で考えながら朝練に取り組んでいるうち、死神のことなど頭から消えていた。

夢なんてそんなものだ。

「今日は転校生を紹介するぞー」

美女と野獣というタイトルがびったりの絵が、黒板の前に生まれる。猪木とあだ名をつけら

れている担任の猪俣いのまたの隣に立つ少女に、クラス中の男子何人かが色めき立った。

まだ教室のあちこちで囁き声が聞こえる中、猪俣は汚い字で黒板に名前を書く。

黒くて長いストリート部屋に涼やかな目。大和撫子というよりは良い黒魔女のような雰囲気  
の彼女の名は「和田わたしずか静香」と書かれた。

「親父さんの仕事の関係で最近越してきたそうさ。じゃ、軽く自己紹介してくれ」

「和田です……よろしく」

外見に似合った小さなベルのような声で言い、軽く頭を下げる。サラリなんて音がして  
そうな髪が少し揺れた。

「見りゃわかるが席は渡辺の隣な。しばらく教科書とか見せてやってくれ」

そう、俺の隣には誰も座っていない席がある。元々女子が若干少ない上に名簿順のクラスだ  
から、昨日までそこには何もなかった。今朝来てみたら当たり前のように机が置いてあるから、  
誰か来ると判っていたが。

おとなしそうな子だし美人だし、なんと言う幸運。

好奇といくつかの恨めしげな視線をスルーして返事をする。

彼女もそんな視線など慣れていいのか表情を変えることなく席に着くと、俺に向かって軽く  
会釈をしてくれた。

「渡辺君……？ よろしく」

「よろしく、和田さん」

猪俣に言われたからと教科書をくつつけた机の真ん中に置いたが、彼女は鞆から黒いカバーの掛かった分厚い本を取り出し、授業そっちのけで本に視線を落とした。ノートを出す事すらしない。

(……変わり者、だな)

さっきまで抱いていた印象を頭の中で書き換える。

一時間目の授業が終わっても、和田は本を読む手を止めなかった。それどころか休み時間に机の周りに好奇心を隠そうともしない女子の群れが集まっても、次の授業が始まって、彼女は全てを受け流し、静かに本を読み続けた。

まるで名は体を現すかのように。

こういうタイプと仲良くすると仲間よろしく変人扱いされる。そう頭では解っていないながらも不思議と気になってしまい、放課後帰ろうとしない彼女に話しかけた。

「ずっと何読んでんの？」

女子と同じく受け流されるだろうと思っていたが、意外にも彼女は読む手を止め、視線を俺に向けた。

「……渡辺君、占いは好き？」

質問に質問を返されたが、気にせずさらにオウム返しする。

「占い？」

「ええ。私タロットが好きで、その本なの」

「名前は聞いたことあるけど、よくは知らない」

そう答えると、和田は鞆の中から長方形のケースを取り出した。黒くつや消しの施されたそれを開け、俺に見えるように差し出してくる。

上質だろう艶やかな光を反射をする紙に、西洋の古めかしい絵が描かれている。かぼちゃパンプンのような格好をした男は、崖に気づいてないような顔をして片足を踏み外していた。下の方には「THE FOOL」の文字。

「なんか、ちょっと気持ち悪い絵だな」

正直に感想を伝えると、それが面白かったのか和田が小さく笑う。

彼女は箱の中からカードを取り出した。

「占ってあげましょうか？」

占いの類は信じてない。雑誌の恋愛占いで一喜一憂する女子を見ても、そんなの捕らえ方次第だろと思うのだが……。



「こっちに座って」

なんとなく興味が湧いた俺は、彼女に言われるまま向かいに座った。

初夏に近づいた夕方の教室。俺と和田しか居ない空間は不思議と静かで、紙擦れの音が聞こえるほどだった。校庭に響く野球部顧問の怒声も、薄いフィルターを通したかのようにどこか遠い。

「一枚選んで、それでこの先を読み解くって占い方法があるの。それにしましょう」

和田は裏に伏したカードを卓上でかき混ぜた後、一枚の山札に戻した。それを横一直線にザッと広げると、声には出さず俺を促す。

場の空気と彼女の神秘的な雰囲気に影響されたのか、一枚を選ぶだけなのにえらく緊張した。カードの上を何度も行き来し、たつぷりと時間をかけた末に一枚を選んだ。

和田が選んだカードを引き抜いてゆっくりと裏返す。

面には、鎌を持った骸骨と「XIII」の表記。

「あら」

彼女が少し驚いたような声を出した。

「死神のカードだわ」

何度も言うが、俺は占いの類を信じていない。本当に。

良いことを言われると気分が良くなるのと同じように、悪い事だけ言われれば気分だって暗くなる、ただそれだけだ。

「ただいま」

和田に占ってもらった後、塾に行き、家に着いたのは夜十一時近く。共働きの親は今日も帰りが遅いのか、家には誰も居なかった。

コンビニで買った軽食を片手に廊下を進み、自室の扉を開け――

「おかえりなさい、お待ちしてましたよ」

「うわっ!!」

素で大声を出して驚いた。

忘れていた夢の記憶が一気に呼び戻される。

黒く長い服。胡散臭い笑みとイケメンボイスによる死の宣告。

夢に出た死神が、俺のデスクに座って待ち構えていた。

「なっ……な……」

「本来はあのままご同行するはずだったんですが……ちよつとこちらでも色々大変で」

死神は例の黒い本を閉じて言った。驚く俺の事などお構いなしだ。

「ルール説明も不十分に失礼しました。改めてご説明を」

「待て！ お前、夢じゃなかったのか……!?」

俺がようやく言葉を出し叫ぶと、死神は楽しそうに目を細め笑う。

「もちろん夢ではありませんし、君の死が決定している事も変わっていません。死からは、何者も逃れられないので」

そう言うとき彼は人差し指を立て、胸の前で小さく一振りする。

ジャラツという鎖の擦れる音と同時に、俺の右腕が重みを感じた。目を向けると細く干からびた骨の手が手首を掴んでいて、鎖はそこから死神に向かって伸びている。

彼の左手首にも、俺と同じ骨の手。

恐怖と混乱の入り混じった空気が喉を小さく鳴らした。

「君が生き残るためのルールは簡単です、この手錠の鍵を見つけて外すだけ。もちろん私は鍵の答えを知っています。間違えてもペナルティはありませんが、真剣に考えて頂くために、答えて良いのは一日一回だけです。合理的でしょうか？」

説明なんてほとんど聞いていなかった。

力任せに骨の手錠を外そうとしてみたが、ビクともしない。

「おい！ これ外せよ!!」

「鍵を見つければすぐに外れますよ」

焦れば焦るほど手錠はまるで生き物みたいに食い込んでくる。

何が楽しいのか、死神は俺の様子を見て声も出さずに笑っている。

開け放ったままの廊下から、居間に設置された時計の短い電子のベル音が聞こえた。

「さあ浩也君、残り四日です」

これは夢じゃない。

逃げられない。

俺の死のカウントが、一日減った。

## **Last 4days.**

早起きの習慣はついても、その日の目覚めは最悪だった。

「おはようございます、浩也君。今日から頑張って生き抜いてくださいね」

寝起きにこんなイケメンが声をかけてきたら、女子なら彼のカッコよさと寝起き＋スツピンの己に対して悲鳴を上げているかもしれない。